

平成 25 年度大学コンソーシアムとちぎ「大学を超えた共同研究支援事業」報告書

所 属 機 関 名	作新学院大学女子短期大学部	
団体・グループ等名	とちぎ学研究会	
研究代表者名 (所属部署)	西田 直樹 (作新学院大学女子短期大学部 幼児教育科 教授)	
研究連携担当者名及び連絡先	・ 太田周 (作新学院大学 学長) ・ 増山正明 (足利工業大学 教授) ・ 丸山純一 (文星芸術大学 教授) ・ 大野守 (関東産業能力開発大学校 学務課長) ・ 角田正弘 (自治医科大学 学事課課長補佐) ・ 乾 泰典 (帝京大学 総務グループ庶務チームリーダー) ・ 石原正興 (宇都宮大学産学官コーディネーター)	
研究連携校名	・ 作新学院大学 ・ 足利工業大学 ・ 文星芸術大学 ・ 関東産業能力開発大学 ・ 自治医科大学 ・ 帝京大学 ・ 宇都宮大学 ・ 作新学院大学女子短期大学部	
関連自治体・経済団体等名		

1. 研究事業名	「とちぎ学」(地域学)の教育プログラム推進事業
2. 実施年度	平成25年度・26年度
3. 研究成果等	大学コンソーシアムとちぎ加盟校の多くが、地域密着型の高等教育機関である。これらの組織が担う社会的使命の一つに、「地域を支え、地域の未来を創る力を持った人材の輩出(又は育成)」がある。ところが、地域を支え、地域の未来を創るべき若者が、そのフィールドとなるべき地域に対して、どれほどの知識を持っているかといえば、その知識は極めて脆弱なものである。それは、単に彼らが地域に対する愛着が薄いのではない。かれらが受けてきた教育において、「地域を学ぶ」機会が少なかった事が第一の要因なのである。多くの学生が、小学校の3・4年生の社会科の地域学習を最後に、体系だった教育を受けていないのである。 私たち栃木県内の高等教育機関は、そこで学ぶ若者の多くが、地域を支え、地域の未来を創る人材として活躍できるように(若者の多くが、働く場や生活の場である地域社会との「つながり」を構築できるように)するため、高等教育機関において「地域学習の教育プログラム」の創出と普及に努める必要がある。どんなに専門的な知識を身に付けていても、働くフィールド(つまり「地域」)に対する関心や知識が低ければ、本当の意味で「地域に役立つ仕事」はできないはずである。 以上のような理由により、大学コンソーシアムとちぎ 地域連携事業委員会メンバーと共同で、県内の高等教育機関における『とちぎ学』(地域学)の教育プログラム推進事業に対する支援を受けるために応募した。 その成果は、以下の通りである。 ①「とちぎ学」授業資料の表示方法の研究

県内の複数の高等教育機関において「とちぎ学」の授業を実施するためには、距離的に離れた場所にいる復習の教員のネットワークの構築が必要である、今回は、タブレット端末に画像や文章を表示し、教師用資料または授業資料として使用できる方法を研究した。

担当教員のPCスキルにバラつきがある場合も想定して、市販のプレゼンテーションソフトを使用し、ひつように応じて担当教員が資料の加工もできる方法を確立する事ができた。

②「とちぎ学」（地域学）を考えるフォーラムを、に作新学院大学において開催した。フォーラムの概要は以下の通りである。

- ・ テーマ 「地域と歩める 地域に受け入れられる社会人を育てるために」
- ・ 日 時 平成26年7月2日（火） 13：00～15：00
- ・ 会 場 作新学院大学 清原キャンパス 中央研究棟 第2会議室
- ・ 出席者 19名（一般参加3名を含む）
- ・ プログラム
 - i 開会挨拶 （作新学院大学 太田周 学長）
 - ii 事例報告1
新しい時代の教養教育 ～足利学8年の成果～
（足利工業大学 蟹江好弘 常勤理事）
 - iii 事例報告2
「とちぎ学」の構想と実践
（作新学院大学女子短期大学部 西田直樹 教授）
 - iv 会議
（議長 太田周 学長 〔内容〕意見交換・アピール文採択 等）
 - v 茶話会
（一般参加を含む、参加者の交流会）

※「とちぎ学」フォーラムにおけるアピールについて
（以下のアピールが、フォーラムの会議において採択された。）

- ① 大学コンソーシアムとちぎ「地域連携事業委員会」は、栃木県の大学ならではの魅力的な教育プログラム（「とちぎ学」など地域の特色をいかした教育プログラム）の作成と普及に取り組めます。
- ② 「とちぎ学」をはじめとする地域学習に関連した授業を「連携講座開設授業科目」として取り上げ、県内高等教育機関で学ぶ学生が広く受講できるようにします。
- ③ 大学コンソーシアムとちぎ「地域連携事業委員会」は、「とちぎ学」をはじめとする地域学習を通して、地域と歩める、地域に受け入れられる社会人を育てられるように加盟校や学外の組織及び市民と協働して、この教育事業に取り組めます。

なお、このフォーラムについては「とちぎ学フォーラムの記録」にまとめ、8月31日に刊行した。

4. 今後の課題 及び発展性	①「とちぎ学」（地域学）に関する理解が広まりつつあるが、実際に授業として各校で実施という事には、また高いハードルを越えなければならないと思う。「とちぎ学」については、学習プログラムとしては一応の完成を見ているが、今後は、ねばり強いPR活動は求められるだろう。
-------------------	--